

言語接触による文法複製：英語の従属節におけるVO語順確立とデーンロー地域でのヴァイキング定住との関係について

著者	松瀬 憲司
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	55
ページ	179-192
発行年	2006-11-30
その他の言語のタイトル	Contact-induced grammatical replication : On the relation between the establishment of VO word order for subordinate clauses in English and the settlement of vikings in the Danelaw
URL	http://hdl.handle.net/2298/3002

言語接触による文法複製

—英語の従属節における VO 語順確立とデーンロー地域でのヴァイキング定住との関係について—*

松 瀬 憲 司

Contact-induced Grammatical Replication:

on the Relation between the Establishment of VO Word Order for Subordinate Clauses in English
and the Settlement of Vikings in the Danelaw

Kenji MATSUSE

Received October 2, 2006

Grammatical replication induced by the language contact between the vikings who settled in the Danelaw and the Anglo-Saxons who had lived in the same area can be considered responsible to the word order change in subordinate clauses in English in that:

- (1) Since their languages (i.e. Old English and Old Norse) were cognate Germanic languages, they could have communicated fairly well with each other using their own languages, instead of resorting to bilingualism.
- (2) The settlement did not make any special situation in which they confronted each other. Rather they lived equally and peacefully side by side at least on the popular level.
- (3) The model language, Old Norse, had the verb-third basic word order for their subordinate clauses which was sometimes realized by the movement operation called “stylistic fronting.”
- (4) In the replica language, Old English, there was not as strong a constraint as seen in (older or present-day) German to keep the “rigid” verb-second word order.
- (5) The Old English speakers had an attitude positive enough to fully utilize the linguistic source in order to integrate and simplify their word order for both principal and subordinate clauses.

Key words : grammatical replication, language contact, word order, Old Norse, attitude

1 はじめに

英語における, いわゆる「VO [Verb-Object] 語順」の, まず主節での確立については, 児馬 (1996: 76-81) に次のような主張が見られる.

下表 (1) の Fries (1940) による統計が示すように,¹⁾ それとは逆の「OV 語順」が主流であった古英語 [Old English: 以下 OE と表記] 期に, (2) のようなケースが散見されるという.

(1)		c1000	c1200	c1300	c1400	c1500	
	OV	52.5%	53.7%	40+%	14.3%	1.87%	
	VO	47.5%	46.3%	60-0%	85.7%	98.13%	—橋本 (2005: 176)

- (2) ...*þa hergodon hie up on Supseaxum...* ond *þa burgware hie gefliemdon.*

(=...then made-raids they on the South Saxons... and the city dwellers they put to flight.)

—*Anglo-Saxon Chronicle*, anno 895 (児馬, 1996: 79)

ond 以下の部分で, *þa burgware* と *hie* は, 両者ともこの形態のみでは主格か対格かの区別が付かないが, この場合, 先行文脈より判断して, 「話題化 [Topicalization]」を起こしていると考えられ,²⁾ 従って, ここでは (3a) の解釈しかあり得ず, (3b) の解釈は却下されることになる.

- (3) a. *They put the city dwellers to flight.*³⁾
b. The city dwellers put *them* to flight.

このように、文要素の格語尾の多義性 [Ambiguity] が知覚的に修正されないとすれば、話題化が可能になるためには、語順のレベルで「多義の回避 [Disambiguation]」をしなくてはならない。これが主節における VO 語順確立の引き金になった。

(4) SOV → O_{top}SV: “Ambiguous” vs. SVO → O_{top}SV [*SO_{top}V]: “Disambiguated”

(S=subject, O_{top} = topicalized object)

つまり、上記 (4) に見られるように、話題化される「前段階」で、VO 語順が確立していなければ、格語尾の多義性は解消されていないのだから、話題化の有無に関する多義は回避できないことになる。ただし、従属節では、話題化自体が認められないため OV 語順が残留した、というのが児馬 (1996) の主張である。

この議論では、同一言語内での語形の多義性 (Form/Morphology and Semantics) と文体上のデバイス (Style/Pragmatics) が統語的配列の変化 (Syntax) に寄与した点が指摘され、⁴⁾ 言語変化の複雑さを示す好例となっており、非常に興味深い。

これに対して、Trips (2002) は、生成文法の立場から、OE および初期中英語 [Early Middle English: EME] における、主節および従属節での OV 語順から VO 語順への推移をその統語構造の変化で説明しようとする (Fischer et al., 2000: 138-179 も参照)。ここで議論されている生成文法上の枠組みの提案自体は、本稿の射程外であるので取り上げないが、面白いのは、当該の統語構造の変化を引き起こした「原因」についてである。

Trips (2002: 117) は、VO 語順の生起比率が、イングランドのミッドランド地方南東部のテキストよりも、ヴァイキングたちが入植した同地方北東部および西部のテキストで高いことを指摘した上で、“the Scandinavian language had a strong influence on the English language spoken there, i.e. the underlying VO word order pattern was introduced into the language by Scandinavian”と述べ、さらにこれは、“an instance of contact-induced language change which was due to *imperfect learning* of the invaders’ language by the native English speakers” (イタリックスは筆者) であると主張する。つまり、OE とヴァイキングたちの言語である古ノルド語 [Old Norse: ON] との「言語接触 [Language Contact]」がその主たる原因と言うのである。⁵⁾

そこで、本稿では、この言語接触が統語構造にまで影響を与え得る事実から把握される社会言語学的なメカニズムを、特に英語の従属節における、OV 語順から VO 語順への推移に焦点を当てながら再考してみたいと思う。

本稿の構成は次の通りである。まず、次の第 2 節では、言語接触が統語構造に影響を与えた典型的な例として、インドの Kupwar 村での言語状況を見てみる。続く第 3 節では、OE から現代英語までの語順を概観し、さらに第 4 節では、ON のそれについて議論する。それらを踏まえた上で、第 5 節で、英語の従属節への VO 語順導入に関わる可能な (社会) 言語学的な説明として、「文法複製 [Grammatical Replication]」(Heine & Kuteva, 2005) という概念を中心に検討する。そして最後の第 6 節で本稿の議論をまとめることにする。

2 Kupwar 村での言語接触例

Holmes (2001²: 215) によれば、インドの Maharashtra 州にある Kupwar 村 (人口 3000 人程度) では、三つの異なる言語を話す人々が長い間ともに暮らしてきた結果、その三言語は、下例 (5) のように、お互いに「逐語訳」ができるくらい非常に似通った言語に変質していったという。これを Heine & Kuteva (2005: 180) は、「文法化領域 [Grammaticalization Area]」で起こる「変型 [Metatypy]」と呼んでいる。⁶⁾

- (5) a. pala jəra kat ke le ke a ya
 b. pala jəra kap un ghe un a l o
 c. tapla jəra khod i təgond i bə yn
 (=greens a little cut having taken having come PAST I)

“I cut some greens and brought them.”

そもそも、この村は二つの語族地域の境界上に位置していたために、変型のような現象が生じたのである。その語族とは、「印欧語族 (ウルドゥー語 [Urdu] とマラーティー語 [Marathi])」および「ドラヴィダ語族 (カンナダ語 [Kannada])」で、元来、イスラム教徒は (5a) のウルドゥー語を、不可触民らは (5b) のマラーティー語を、そしてジャイナ教徒は (5c) のカンナダ語を使うという具合に、社会集団ごとに固有の使用言語を持っていた。しかし、三者の長期にわたる共生のために、Kupwar の村人は誰でも三つの言語を操るようになっていった。そうするなかで、三言語は互いに類似性を高めて行き、語順はついに同一になり、⁷⁾ 単語や屈折の構造にも広範な類似性が認められるようになったのである。

この Kupwar 村での言語変型の例では、同族同系統接触と異系統接触の二つが同時に絡んでいる点が非常に興味をそそられる。共に印欧語族インド語派に属するウルドゥー語とマラーティー語間の変型は、ある意味スムーズに行われ得たであろうことは想像に難くないが、異系統のドラヴィダ語族カンナダ語でさえ、ここまでの類似性を呈するようになるという事実が物語っていることとは、ここに見られるような「文法の融合・変型」を推進する大本は、やはり何と言っても村人間の「コミュニケーションの必要性」であると言うことであろう。ただ、面白いのは、それならばむしろいっそのこと、三者の間で使用する言語を融合した一言語に統一する方が合理的な気がするが、事実そうはなっていない点であり、どんなにそれぞれの言語の文構造が似通っていても、例えば、“cut”を表す語や“taken”を表す語に見られるように、「語彙」の部分で必ず区別をつけている点である。つまり、そのレベルで明示的な差異を「意図的に」創り出していると言える。Holms (2001²: 216) は、このことから、言語が二つの基本機能、すなわち「指示的・情動的機能」と「社会的・情動的機能」を持つなかで、言語変化は決して無制限ではなく、しばしば一定の明瞭な限界内で起こるとしている。

では、デーンロー地域での OE 話者と ON 話者の接触の場合はどのような状況だったのだろうか。まず、両者が同族同系統のゲルマン語派に属する言語であるという背景がある。加えて、Trips (2002: 117-118) は、“The linguistic situation in the area which was densely settled by Scandinavians could well imply that the native English adults *learned* Scandinavian *imperfectly* and that their second language usage became primary linguistic data for their children. During the process of first language acquisition, these children adopted the interference features of their parents and spread these ‘innovations’ to others.” (イタリックスは筆者) と述べ、大人の OE 話者による「不完全な第二言語 (ON) 獲得」が、子供にとっての第一言語である OE 獲得の際に、「阻害要因」として働いたことが結果的に OE 側に言語変化をもたらした、としている。ただし、Trips (2002: 118) も認めているように、なぜそれが阻害要因として働き、わざわざ外国語の要素の方を受け入れてしまうのかについては、例えば、この場合、三人称複数人称代名詞を ON から導入した時のような明らかな OE 側のメリットが存在するようには思えないところもあり (註 3) 参照)、事実よく分からないのである。本稿では、その理由の一端を明らかにできればと思っている。手始めに、英語側の語順にまつわる事実から見てみよう。

3 英語における語順の変遷

前々節では、Fries (1940) の統計を使って、英語における OV 語順から VO 語順への変遷の概要を見たが、ここで、Denison (1993: 28-30) により、まず、現代英語 [Present-Day English: PDE] における統語構造での定 (形) 動詞 [Finite Verb: V_f] の位置 (以下全ての例文においてボールドフェイスで表示) を確認しておくことにする。

- (6) a. **Have** you seen Jimmy?
 b. **Will** Fred be coming?
 c. **Is** that so?
- (7) a. Who **gave** you that camera?
 b. Which delegate **did** you take a picture of?
 c. Never in all my life **have** I been so embarrassed.
- (8) a. Jimmy **spoilt** his chances (last year).
 b. * Last year **spoilt** Jimmy his chances.
 c. Last year Jimmy **spoilt** his chances.
 d. (You must know) that Jimmy **spoilt** his chances.
 e. (the chances) which Jimmy **spoilt** by his foolish behaviour
 f. [ϕ] Jimmy **spoilt** his chances (last year).
- (9) a. Such problems I **avoid**.
 b. Down it **came**.

(6a-c) から明らかなように、PDE では、 V_f が文頭に起こる構造 (以下 $V1$ と表記) は、Wh 句を伴わない通常の Yes-No 疑問文に限られているので、非常に特殊な構造であると言っていい。⁸⁾

次に、 V_f が第二要素となる構造 ($V2$) は、(7a) や (7b) のように、Wh 句を伴う疑問文、および (7c) に見られる否定副詞要素を前置したことによって起こる、主語と V_f の「倒置構造」が挙げられる。この後者のカテゴリ

には、いわゆる「there 構文」に加えて、“Here comes the bus.”や“Down came the rain.”等の「提示文・出現構文」も含まれるだろう。いずれにしても、有標の構文であると言っていい。しかしここには、(8a)のような、「無標の」SV (O) 構造を持つ平叙文は含まれない。何故か。それは、PDE では、last year という「通常の」副詞要素を前置しただけでは、(8b)のようなV2構造を実現する倒置は起こらず、(8c)のようにV_iが第三要素となる構造(V3)になるからである。この構造は、(8d)や(8e)に見られるthat/Wh補文や関係詞節といった補文標識を持つ「従属節」に典型的である。したがって、PDEにおいては、主節の場合には、(8f)のような(深層)構造をしていると考えられ、(8a)はV2構造ではなく、むしろV3構造と捉えられるべきなのである。

そして、最後のパターンは、V_iが文尾に生起する構造(VF [Verb Final])であり、(9a)のような、前出の話題化構文や(9b)のような、提示文の主語が代名詞になるタイプが挙げられるが、これらも有標性が高いと言わねばならない。

英語における主たる語順構造は、V2か、はたまたV3かを巡る議論に関連して、どちらもゲルマン祖語[Proto-Germanic]から派生した言語でありながら、片や北ゲルマン語のONから派生した現代デンマーク語(下例(10))と、片やOE・PDEと同じ西ゲルマン語に属する現代標準ドイツ語(下例(11))とでは、両者を比べてみると、異なった振る舞いをする事が分かる。

(10) a. Denne film **har** bønene set.

(=This film **have** children-the seen.)

b. Han siger at bønene **har** set denne film.

(=He says that children-the **have** seen this film.)

(11) a. Diesen Film **haben** die Kinder gesehen.

(=This film **have** the children seen.)

b. Er sagt, daß die Kinder diesen Film gesehen **haben**.

(=He said that the children this film seen **have**.)

—Vikner (1995: 43)⁹⁾

両言語とも、主節では、SV (O) の構造を持つ一般的平叙文のみならず、(10a)や(11a)に見られる倒置構文のOVSでも、V2構造が遵守されている点は共通しており、これはPDEと大きく違う所だが、従属節においては、現代デンマーク語が(10b)のようなV3構造を取り、現代標準ドイツ語が、(接続詞が介在しているので、V2構造を維持することができないため)(11b)のようなVF構造、すなわち「OV語順」を取る点から、前者はPDE的であり、後者はOE的であると言っていい。特に、英語における従属節でのVO語順の発達を考えると、¹⁰⁾このことは非常に示唆的である。

さて、それでは、デーンロー地域でヴァイキングらが遭遇したOEにおける基本的語順パターンについてであるが、安藤(2002: 131-134)は、次の五つのタイプを挙げている。¹¹⁾ここで(12a-d)に示されているのが主節での語順で、その中では、(12a)が最も一般的であり、以下(12b), (12c), (12d)の順で一般性が低下していく。最後の(12e)は、従属節における語順である。

(12) a. SV_i(O/C): He **lufode** forhæfednysse. “He **loved** temperance.”

b. SOV_i: Min mod *me* **forlet**. “My mind **forsook** *me*.”

c. XV_iS: Dæ **answarode** he *him*. “Then he **answered** *him*.”

d. V_iXS: **Com** ða to recede rinc siðian. “**Came** then to the hall (the) warrior marching.”

e. CONJ + SXV_i: Gif we ða stilnesse **habbað**, “If we **have** peace,”

[C=Complement, X=Adverbials, Conjunctions, etc., & CONJ=Conjunctions]

一見して分かることは、「提示文」である(12d)がV1構造、(12a)と(12c)がV2構造、そして、Oが名詞ではなく「代名詞」である場合の(12b)と従属節での(12e)がVF構造であり、PDEの主要構造であるV3は、ここには全く見られないことである。

ここで、(12b)に関しては、Hogg (2002: 90)は、“There was a clear preference in Old English to place light elements, that is to say, elements with only minimal phonological content, towards the beginning of the clauses, and, conversely, to place elements with a great deal of phonological content at the end of the clauses.”と指摘し、「重量原則 [weight principle]」で説明しようとしているが、その後の展開として、例えば、英語と同じくSVO語順を基本とする現代フランス語において、その目的語が代名詞の場合に現れるSOV語順は、古フランス語[Old French]期から既にあった語順を踏襲したものであることなども考え合わせると(Kibler, 1984: 4), OE期以降英語では、いわゆる「軽量」であるにもかかわらず、代名詞目的語さえも(重量原則を無視して)徐々にSVO

語順に組み込んでいったという流れは、非常に意味深長であると言わねばならない。

(12e) に代表される従属節での構造については, Trips (2002: 76-77) の OE のデータで確認しておこう。

(13) a. *ða godan weorc ðe he ær geworht hæfde.*

(=the good work that he before made **had**)

—*Cura Pastoralis*

b. *þa he ðæt gedon hæfde, ...*

(=When he that done **had**, ...)

—*Bede's Ecclesiastical History*

c. *ðæt Rachel hæfde ða anlicnyssa forstolen.*

(=that Rachel **had** the idol stolen)

—*Heptateuch, Genesis*

確かに, (13a) の関係詞節や (13b) の副詞節では, 定番の VF 構造が依然として見られるが, (13c) の *that* 補文では, V3 構造が早くも現れている。さらには, 次のような不定詞を伴う法助動詞構文である (14) では, 定番の VF 構造へのこだわりを捨て去っているかのように見える, V3 ならぬ「V4 構造」, もしくは「V5 構造」とでも呼ぶべき形を取っている点が非常に興味深い (上記の Hogg (2002) 流に言えば, 間接目的語の *him* は「軽い」ために, 重量原則により前置されていることになろう)。¹²⁾

(14) *þæt þa Deniscan him ne mehton þæs ripes forwiernan*

(=that the Danes *them* not **could** the harvest refuse)

—*Anglo-Saxon Chronicle*

次に, EME での *that* 補文における, (14) と同様の不定詞を伴う法助動詞構文のデータも Trips (2002: 104-105) で見てみると,

(15) a. *þt ich nule þe forsaken*

(=that I **not-will** *you* forsake)

—*St. Juliana*

b. *ðat ic mihte hauen ðat eche lif*

(=that I **might** have that same life)

—*Vices and Virtues*

c. *þet ye mahen ane pine me here*

(=that you **may** alone torture *me* here)

—*St. Juliana*

(15a-c) 全てに V3 構造が見られるのだが, (15a) は, まだ代名詞目的語が不定詞の前に置かれている点で, 過渡期の構造をしている。これに対して, 名詞句だけでなく, 代名詞までも動詞成分の後に置かれている (15b) と (15c) は, 名実ともに「PDE 的」V3 構造を持つと言っていい。

そしてとりわけ, 1200 年頃, イングランドのミッドランド地方北部で作成されたとされる『オルムの書』[*The Ormulum*] では, 上記 (15) のような南部地域作品での分布以上に, 下例 (16) に示すように, 従属節においていわゆる V3 構造が確立していると Trips (2002: 111 & 115) は指摘する。¹³⁾

(16) a. *ziff þatt he wolde himm lokenn*

(=if that he **would** *him* observe)

b. *swa þatt tu miht Drihtiness are winnenn*

(=so that you **might** Lord's kindness win)

c. *þatt Drihtin sholde gifenn uss god sawless e3hesihþe.*

(=that Lord **should** give *us* good soul's eye sight)

d. *E33whær hæþ þu shallt findenn hemm among Goddspelles wordess.*

(=Everywhere there you **shall** find *them* among Gospel's words)

ここでも, 代名詞目的語や名詞句が不定詞の前に置かれる (16a), (16b) のような構造も依然としてあるにはあるが, (16c), (16d) のような動詞成分を「一括した」V3 構造も十分に一般的になっている。

以上, これまでの議論から見てくることは,

(17) 英語の基本的語順は, V2 構造を V3 構造へと「捉え直す」ことにより, (ドイツ語のように現代語においてでさえも依然として) V2 構造に固執するが故に, 従属節では VF 構造に転換しなければならない不首尾を克服し, 主節・従属節ともに「統一的で簡素化された」構造を確立して行ったのではないか (註 10) 参照)。

ということになろう。では, その捉え直しはいかにして行われたのか。それは, OE 話者がデーンロー地域において, ヴァイキング達が話す ON と接触したことがその鍵を握っていると思われるのである。この検討に入る前に, 次節において, その ON における語順を確認しておこうと思う。

4 古ノルド語の語順

まず, Rask & Dasent ([1843] 1976) は, ON は高度な屈折言語であるため, “the construction is more free than in the new tongues” (p. 180) としながらも, その構造は SVO を基本とし, “..., which may however be changed in manifold ways, according to the meaning of the speaker, as well as the connection with foregoing or following clauses in the context.” (p. 182) と指摘している. そして, Faarlund (2004) も, ある意味, “a language that permits ‘free’ word order” (p. 239) であるとし, “This [=OV] is an older pattern, common in Proto-Germanic and Indo-European, which still exists in Old Norse. Since the basic order in Old Norse appears to be VO, ...” (p. 161) と述べ, VF 構造の存在も否定してはいないが, さらに, “The finite verb typically takes up the second position in the sentence: In subordinate clauses, too, the finite verb is usually placed in second position, not counting the complementizer or the interrogative phrase introducing the sentence.” (p. 191) とも言及しているところから, ON では, 主節においては (下例 (18)), V2 構造が, そして従属節においては (下例 (19)), いわゆる V3 構造がその基本語順であったと考えられる (Cf. 上例 (10) の現代デンマーク語).¹⁴⁾

(18) a. Óðinn **átti** tvá bræðr.

(=Odin_N **had** two brothers_A)

“Odin **had** two brothers.”

—Faarlund (2004: 181)

b. í bók þessi **lét** ek rita fornar frásagnir.

(=in book_D his **let**_{IS} I write ancient stories_A)

“In this book I **have** had ancient stories written down.”

c. nú **gerir** maðr langskip í heraði.

(=now **makes** man_N long-ship_A in district_D.)

“Now a man **makes** a long-ship in the district,”

—Faarlund (2004: 191)

(19) a. at engi **komisk** í braut.

(=that nobody_{MN} **come**_{SUB, REF} away)

“That nobody **escapes**.”

b. [ráða] hversu málin **lúkask**.

(= [decide] how matters_{SN} -the **close**_{3P, REF})

“[decide] how matters **are to be settled**.”

—Faarlund (2004: 192)

[文法的形態素の説明: N=nominative case, A=accusative case, D=dative case, 1S=1st person singular,

MN=masculine, nominative case, SUB=subjunctive, REF=reflexive, & 3P=3rd person plural]

主節の (18b) および (18c) では, 副詞的要素の前置に伴って主語動詞間に倒置が発生し, V2 構造が維持されており, また, 従属節では, (19) のように, 補文標識や疑問詞が介在するので, V3 構造となっている. ただ, Faarlund (2004: 231) は, 連続した narrative の談話構造 (下例 (20a) と (20b) は連続して起こっている) や接続詞 ok “and” の直後 (下例 (21)) などの限られた状況において, V1 構造がしばしば現れることを指摘している.¹⁵⁾

(20) a. [síðan **skaut** hann Ásmundr at Ásbirni...] **fell** Ásbjörn dauðr frá stýrinu.¹⁶⁾

(= [since **shot** he Ásmund_N at Ásbjorn...] **fell** Asbjorn dead_{MN} from helm_D -the)

“[Then Asmund **shot** at Asbjorn...] Asbjorn **fell** dead from the helm.”

b. **fóru** síðan hvár-tveggju leiðar sinnar.

(=**went**_{3P} since each_{PMN} -two_{DEF, G} ways_A their_{REF})

“Then both of them **went** their own way.”

(21) ok **sá** allir dyrð guðs koma.

(=and **saw**_{3P} all_{PMN} glory_A god_G coming)

“and they all **saw** the glory of God coming.”

—Faarlund (2004: 231)

[PMN=plural, masculine, nominative case, DEF=definite declension, & G=genitive case]

加えて, Faarlund は, この V1 構造は, 「話題欠如 [Topicless] 構造」と捉えることが可能であるため, 原則的な ON の V2 構造は依然として維持されていると主張する.

さらに、同じ V2 構造でも、ON には、以下のような特殊な話題化のパターンも見られる。

- (22) a. gull **hefir** þú eðsilfir.¹⁷⁾

(=gold_A **have**_{2S} you_N or silver_A)

“You **have** gold or silver.”

—Faarlund (2004: 199)

- b. sjá **má** ek þik.

(=see **can**_{1S} I you_A)

“I **can** see you.”

—Faarlund (2004: 235)

- c. góðan **eigum** vér konung.

(=good_{MA} **have**_{1P} we king_A)

“We **have** a good king.”

—Faarlund (2004: 236)

[MA=masculine, accusative case, IP=impersonal, 1P=1st person plural, & 2S=2nd person singular]

(22a) では、等位接続詞で結ばれた対格目的語の一部分だけが前置されているが、これは名詞句でもあり、まだ我々にも理解可能な話題化であろう。しかし、それに比べて、(22b) では、述語動詞成分の一部である不定詞が、そして (22c) では、対格目的語である名詞句の限定詞の部分のみが前置されるという「部分的」話題化までが許容されるのである。

なお、従属節では、OE 同様話題化は起こらないが、そのかわり、下例 (23) のような、「文体的前置 [Stylistic Fronting]」と呼ばれる要素移動がしばしば生じるため、V3 構造が正統的であると、Faarlund (2004: 250-251) は説明する (前置部分はイタリックスで表示)。つまり、(23a) では、過去分詞が、(23b, c) では、副詞が補文標識や関係詞と定動詞の間に移動して、V3 構造を保持しているのである。¹⁸⁾

- (23) a. at *fallnir* **væri** búðarveggir hans

(=that *fallen*_{PMN} **were**_{SUB, 3P} booth-wall_{SN} his)

“that the walls of his booth **might have fallen** down”

—Faarlund (2004: 238)

- b. í þau konungs herbergi er *herzt* **munu** vera góðir siðir í hafðir

(=in those king's quarters_A which *most* **may**_{3P} be good customs_N in had_{PMN})

“in those king's quarters where good customs **must especially** be observed.”

- c. með þvílíkri stómensku, sem *nú* **leiðir** hon hann inn

(=with such greatness_D, as *now* **leads** she him_A in)

“with as much grandeur as she *now leads* him in”

—Faarlund (2004: 251)

この文体的前置は、Holmberg & Platzack (1995: 3-4) によれば、ON から派生した現代のスカンディナヴィア語系列の中では、アイスランド語 [Icelandic] とフェーロー語 [Faroese] のみに痕跡をとどめており、ノルウェー語・スウェーデン語・デンマーク語からは 15 ~ 16 世紀あたりに消失したとされている。また、この移動は、語用論的理由から適用される話題化とは違って、その名の如く、全くの文体的バリエーションとして機能する操作であるという。

Trips (2002: 306-314) は、この文体的前置が前出の『オルムの書』に多数見られることも、英語が ON から多大な影響を受けた証左であると指摘するのである。

- (24) a. þatt oferrwercc þatt *timmbredd* **wass** abufenn Godess arrke

(=that over-work that *built* **was** above God's ark)

- b. þatt wiff þatt *usell* **wass** & wædle

(=that woman that *wretched* **was** and poor)

- c. þatt mann þatt *nohht* ne **shall** onn me wiþþ fulle trowþþe lefenn

(=that man that *not* NEG **shall** on me with full faith believe)

- (25) a. all afftterr þatt itt *cwiddedd* **was** þurh Gabriællehenngell

(=all after that it *told* **was** through Gabriel archangel)

- b. þatt 3ho *clene* **wass** off alle menn onn eorþe

(=that she *clean* **was** of all men on earth)

- c. þohh þatt he *nohht* ne **kepeþþ** her to gilltenn hisþannkess

(=though that he *not* NEG **keeps** here to transgress his will)

上例 (24) および (25) では、過去分詞の前置 (例文 a)、形容詞の前置 (例文 b)、そして否定辞 *nohht* “not” の

前置 (例文 c) が示されている。ただし, (24) は V3 構造を持つ主格関係詞節であり, 一方, (25) は代名詞主語と共起する場合で, V4 構造になっている。ここでは, 確かに, V3 もしくは V4 のバリエーションは見られるにしても, OE 期の従属節において典型的だった, ドイツ語的な VF 構造が消失している点に注目したい (オプション的な文体的前置を起こさなければ, V3 構造は維持されるからである)。

5 文法複製の条件

ところで, Heine & Kuteva (2005: 160-163) は, 「文法複製」(要素移植のモデルを提供する「モデル言語」から, そのモデルを利用する「複製言語」への譲渡プロセス) という大きな言語変化の枠組みの一部をなしている, いわゆる「文法化 [Grammaticalization]」現象を伴う, 接触到起因する言語変化の一例として, フランスはブルターニュ地方で話されている, 島嶼ケルト語系ブルトン語 [Breton] を取り上げる。

(26) a. **Mae** 'r tywydd yn braf.

(=is the weather AP nice) [AP=Adverbial particle]

“The weather is nice.”

b. An amzer a **zo** brav.

(=the weather VP is nice) [VP=Verbal particle: i.e. Relative *that*]

“The weather is nice.”

—Ternes (1999: 238)¹⁹⁾

(26a) は, ウェールズ語 [Welsh] の例で, これはブリテン島の VSO 語順を持つ島嶼ケルト語系言語であり, 他方, (26b) は, ブリテン島にアングロ・サクソン人が侵攻した際, 故国を離れ, 対岸フランスのブルターニュ地方へと逃れた人々の言語である同系統のブルトン語で, SVO 語順を示している。この事実は, ブルトン語話者が SVO 言語であるフランス語を使用して生きて行かなければならなかったという社会状況がもたらしたものであると予想される。すなわち, フランス語との言語接触の結果であろうと考えられるのだが, ここで, 以下二点の素朴な疑問点が浮かび上がってくる。

(27) a. SVO 語順になったとは言え, (26b) は, いわゆる関係詞節構造をしており, 純粋な主節となっていない (にもかかわらず, 主節として「理解される」)。

b. フランス語と同じ SVO 言語である英語と社会的・地理的に共存関係にあり, ブルトン語と同系統である, 連合王国の一角をなすウェールズのウェールズ語の場合, この変化は全く起こっていない。

まず, (27a) に関して, Heine & Kuteva (2005) は, ここでの SVO 語順への移行は純粋な統語的变化ではなく, 元来二節からなる分裂文構造 (歴史的には関係詞節構造) だったものが, その焦点構造が文法化され, 焦点化された主語が文頭に移動したために単節構造と解釈されるようになった「語用論的」プロセスの結果であると説明する。この関係詞を使った二節構造を単節構造に解釈する現象は, 口語フランス語 [Colloquial French] やガスコニ語 [Gascon] といったブルトン語と隣接するロマンス語系言語にも見られることから, ブルトン語話者は, それらの言語の文法化プロセスをブルトン語に複製したと考えられるとする。この議論は以下 (28) のような流れにまとめられる。

(28) a. ブルトン語は直近の隣接するロマンス諸語と, ある文法化プロセスを共有する。

b. このプロセスは, ブルトン語と言語系統的に密接な繋がりがあるブリテン島の島嶼ケルト語系言語には起きていない。

c. ブルトン語は周辺ロマンス諸語と十分な言語接触を果たしており, それは多量の言語移入に結実しているので, 当該の現象は接触による移入の一例であると考えてよい。

d. 二節焦点構造の単節化は, 言語に共通して全く見られないわけではないことから, それが隣接する言語に見いだされるならば, 言語接触がその事実を説明するもっとも有力な仮説を提供すると思われる。

次に, (27b) に関しては, ブルトン語とフランス語のアクセント表示構造の類似性で説明可能であるとされる。英語の場合, 語そのものにアクセントを置くことで焦点化できるが, 前二者はそれができないために, 構造的に分裂文を使って焦点を表示するのである。ウェールズ語は, 英語とはアクセント表示が違うために, 英語の語順をモデルにすることがなかったと考えられている。

このように, Heine & Kuteva (2005) は, ブルトン語における SVO への語順変化を, 言語接触によって, モデル言語であるフランス語 (ブルトン語話者にとっての第二言語) の統語構造を単純に模倣し, 吸収したと考える

のではなく、そこに当該言語の周辺に起こった文法化プロセスを複製するというステージの存在を指摘することで、広く文法化に関わる現象として捉え直している。もちろん、全ての言語接触に文法化が関わっているわけではないし、また、文法化は必ずしも言語接触と共に起きるわけでもない。したがって、少なくともここで言えることは、やはりブルトン語における複製の場合も、モデル言語およびそれが持つ何らかの複製言語との「類似性」の存在は不可欠なものであり、たまたまそこに文法化というステージが介在していたに過ぎない。

さて、上記の例を含めて、Heine & Kuteva (2005: 35) が提示する、言語接触による文法複製の際に話者が直面する要素としては、次のものが挙げられている。

- (29) a. 社会言語学的背景
- b. モデル言語の構造
- c. 複製言語の構造
- d. コミュニケーションの必要性和意図
- e. モデル言語と複製言語を結びつける共同体を特徴付ける文化的価値
- f. 利用可能な言語資源を新規に使用するための創造的行動の活性化

では、デーンロー地域での OE 話者と ON 話者の接触の場合、上記の要素はどのように関連していたと考えられるのだろうか。

まず、(29a) の社会言語学的背景については、Baugh & Cable (2002⁵: 96) が “The Anglian dialect [of OE] resembled the language of the Northmen [=ON] in a number of particulars in which West Saxon [dialect of OE] showed divergence. The two may even have been mutually intelligible to a limited extent.” とし、Smith (1992: 50) が “These folk [i.e. Scandinavian peoples] had been integrated into the Old English-speaking community fairly easily—‘Norse’ and ‘English’ in the late Anglo-Saxon times seem to have been more or less mutually intelligible—” と述べ、さらに “As a result of this contact, there were many parts of the country where English had become *thoroughly* ‘Scan-dinavianised.’ ” (イタリックスは筆者) と指摘していることから、両言語の系統的「同質性」が真っ先に指摘できるだろう。また、一般的な言語接触では、“It is very rare that contact is between equals and more or less symmetric” (Coulmas, 2005: 147) であるが、デーンロー地域への ON 話者ヴァイキング移住の場合、Leith (1997²: 22) が “... on many occasions the Scandinavians did not replace the Anglo-Saxons from their own settlements, but grouped themselves near them, often in less fertile places. ..., the newcomers did not, and could not, impose an alien set of customs and institutions; nor could they impose their language even if, for a time, it may have been socially dominant.” と言及しているように、両者の接触の「対等性」は夙に指摘されるところであり、ON 話者は、支配者階級の言語である ON を被支配者である OE 話者に押しつけるのではなく、むしろそれぞれが、「デーンロー中の多くの小さな定住地で移民は急速にノルド語を捨てて英語を取ったに違いない」(ノールズ, 1999: 47) とさえ考えられるのである。

次に、(29b) および (29c) の両言語の構造に関してだが、上記 3 節及び 4 節での議論で明らかなように、モデル言語としての ON は、主節では V2 構造、従属節では、V3 構造をなしており、複製言語としての OE の方は、主節では V2 ないし V3 構造、そして従属節では VF 構造をとっていた。両言語は、主節では、類似の構造を持っていたが、従属節では、大きな相違を示していたと言える。

そのような状況の中で、両言語話者間には、共存を余儀なくされたことから、(29d) に指摘されるコミュニケーションの必要性はもちろん下地として大いにあったであろうし、入植するヴァイキングらのキリスト教への改宗などに留まらず、(29e) での共有される文化的「価値」としても機能し得たと考えられる、接触の対等性はコミュニケーションの意図をいやが上にも増幅したに違いない。つまり、両者間には、コミュニケーションをとりやすい状況が十分に確立されていたと見るべきであろう。

最後の (29f) に見られる、創造的行動の活性化に関してだが、松瀬 (2005) では、Townend (2002), Ritt (2003²) および Winford (2003) の議論に基づき、同族同系統言語を用いた対話の際に発揮される「語用論的理解可能性 [Pragmatic Intelligibility]」(Townend, 2002: 183) を踏まえた ON 聴者 (=OE 話者) 側の「態度・姿勢 [Attitude]」の重要性を指摘した。²⁰⁾ これは、両者間のコミュニケーションは、「系統照合 [Genetic Patterning]」(Heine & Kuteva, 2005: 23-24) により明らかである、両言語の同質性を基礎にしたコミュニケーションであったためにお互いの母語使用も十分可能であったという、必ずしも二言語使用 [Bilingualism] を必要としない、ある意味「恵まれた状況」の中で行われたであろうし、だからこそ ON 聴者として得た「有益な」情報を、OE 話者は OE に積極的に取り入れ得る環境にあったことを意味している。すなわち、デーンロー地域においては、OE 話者は

ON を吸収し、創造的に再利用（新規の用法）する積極性を、他方、ON 話者は OE 話者に組み込まれることをも厭わない積極性を、接触の際の両者の態度として発揮しえる状況にあったと言っているのではないか。

このように考えてくると、英語の従属節における VO 語順への変更は、Trips (2002) の言うような、第二言語獲得の際の「学習の不完全さ」といったある種の誤謬に基づくものではなく、もっと能動的でかつ積極的な新規用法の創造が関与していたと思われるのである。その OE 側におけるその大きな動機としては、

(30) a. ドイツ語のような「厳格な」V2 構造が確立しなかった主節では、SVO も SOV も認める事態が発生し、従属節における V2 構造の保持に代わるものとしての VF 構造の必要性は、英語においては強い制約となりえず、むしろ両方の節において、V2 構造にこだわらずに、V3 構造として語順を統一し、簡素化する方向性を創出する素地があった。

b. その語順統一のためのモデルを提供した ON の従属節では、文体的倒置などにより、V3 構造が維持される傾向にあった。

ことが挙げられるだろう。確かに、ここでは、Heine & Kuteva (2005) のいう文法化そのものは関与していないが、例えば、Trips (2002) も認めているように、V3 構造を維持できる、従属節に独特な文体的倒置は、EME のデーンロー地域のデータに明らかに多数存在していることから、英語側に ON の従属節の語順をモデルとした文法複製が頻繁に行われ、V3 構造の定着に一役買ったことは確実であろう。そして、OE と ON の接触には、そのことを可能にするだけの十分な条件が揃っていたと考えていい。

6 ま と め

本稿での議論をまとめると以下ようになる。

デーンロー地域における OE 話者と ON 話者の言語接触では、両言語が同族同系統であったことを背景とし、その同質性の故に二言語併用状況をわざわざ作り出すまでもなく、かなりの程度お互いにコミュニケーションをとることが可能であったと考えられる。また、両者間の社会的・政治的関係は、（後にウェセックスによるデーンロー地域の奪還があったにせよ）いわゆる支配・被支配の関係であったにもかかわらず、ON 側からの言語を含めた文化の強制もなかった。むしろ逆に、改宗のみならず、自ら OE 話者に溶け込もうとする ON 話者の「コスモポリタンの」態度 (Baugh & Cable, 2002⁵: 95) が持つ積極性は、両者間の接触の対等性へと繋がっている。

そのような ON 話者が掛け値なしに ON を使用できるという状況の中で、OE 話者は、従属節の語順確立のモデルとして十分に ON を捉えることができたはずである。彼らはそこから「積極的に」文法複製を行い、自らの OE を一部「ON 化 [Scandinavianize]」することで、ドイツ語的厳格な V2 構造の縛りによってもたらされる VF 構造からの脱却をはかったのではないか。そして、それは決して OE 話者が ON を不完全に学習し、次世代へ伝えてしまったというようなネガティブな状況から派生したものではなく、むしろそのことで、主節・従属節共に、語順を V3 構造に統一できるという「簡索性」の達成を可能にする、（ある意味）大きな意図を持った複製ではなかっただろうか。これはまさに、Ritt (2004: 59) 流の言説では、言語を“replicating systems”と捉えたとするならば、OE 系“h-”形の三人称複数代名詞が ON 系“th-”形に置き換えられて複製されたように、英語の従属節においては、V3 構造が VF 構造よりも“replicated more successfully”ということであり、「最適化 [Optimization]」が働いたということに他ならない。言語接触という環境のもとで起こる文法複製は、最適化を目指して複製を敢行する言語進化のメカニズムの一翼を担っているのである。

註

* 本稿は、2006 年 7 月 8 日開催の「熊本言語学談話会 (KLC)」7 月例会での発表内容を発展させたものである。その際、原口行雄氏（熊本学園大学）および市川雅己氏（熊本大学文学部）からは貴重な助言を頂いた。この場を借りて感謝の意を表します。

- 1) Charles C. Fries, “On the development of the structural use of word-order in Modern English,” *Language*, 40, pp. 199-208. ただし、この統計では、主節と従属節での生起状況を併せた形で示されている点は、注意を要する。
- 2) Huddleston & Pullum (2002: 1372-1382) では、伝統的な topicalization ではなく、“(Non-focus) Complement

Preposing”という用語を使用している。

- 3) OE の人称代名詞において、その複数形では、主格形と対格形が区別できなかったという不具合（これは実は普通名詞全体にも当てはまるのだが）は、ヴァイキングたちが持ち込んだ、“th-/þ-”で始まる ON 系代名詞を導入することによって解決された（Horobin & Smith, 2002: 111）。詳しくは、松瀬（2000, 2001, 2004 & 2005）を参照。

このことに関して、Ritt（2003² & 2004）が OE 系と ON 系の競合をダーウィン進化論や最適性理論で説明している点は非常にユニークである。

- 4) 一般的に、Fasold & Connor-Linton（2006: 284）も指摘しているように、屈折語尾の水平化が VO 語順の固定に繋がったと議論されるが、ここでの兎馬の議論から、屈折語尾が豊富であると言われている OE 期においてさえ、既に主格形と対格形の峻別ができない状態が往々にしてあったことがよく理解できる。
- 5) 我々は普段何気なく「ヴァイキング」という語を使用しているが、角谷（2006: 23）は、「ヴァイキング時代（8 世紀半ば～11 世紀半ば）」以後のノルド語の記録では、「ヴァイキング」という言い方がしばしば見られ、「人」そのものとともに「ヴァイキング（行に赴く）」という行為を表す二用法があったとし、後者の方が大多数だったことから、「ヴァイキング＝海賊という特殊な社会的存在＝専業集団」があったわけではない、と指摘している。もちろん本稿では、「デーン人移住者」の意味で使用している。

- 6) Trips（2002: 45）も Kupwar 村の言語接触の例を取り上げているが、ここでは、カンナダ語にはもともと繫辞（copula）がなかったのだが、ウルドゥー語やマラーティー語との接触によって、「繫辞＋叙述形容詞」という構造を借用したことが指摘されている。この出典は、John J. Gumperz & Robert Wilson,（1971）“Convergence and Creolisation: A Case from the Indo-Aryan/Dravidian Border in India,” in Dell Hymes, ed., *Pidginization and Creolization of Languages*（Cambridge: Cambridge Univ. Press, pp. 151-167）である。

この「変型」という用語については、Heine & Kuteva（2005）は、Ross（1996）などに依拠している（Malcolm D. Ross, “Contact-Induced Change and the Comparative Method: Cases from Papua New Guinea,” in Mark Durie & M. D. Ross, eds., *The Comparative Method Reviewed: Regularity and Irregularity in Language Change*, New York: Oxford Univ. Press, 1996, pp. 180-217）。

- 7) ただし、ここで取り上げられている例は、定形動詞を含む節ではないようだが、Comrie（1989: 484 & 728）によれば、基本的語順は三言語とも「(S) OV」であるという。
- 8) 口語では、標記疑問文以外にも、“Sounds/Looks great.”や“Don’s know why.”のように、それぞれ“That”や“I”といった主語を省略したために、V_rが文頭に起こる構造も見られる。
- 9) S. Vikner, *Verb Movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*, Oxford: Oxford Univ. Press. Trips（2002: 226）の引用による。

なお、ここで現代デンマーク語に見られる後置定冠詞（“The Placing of the definite article at the end of the noun as a suffix”）は、古デンマーク語 [Old Danish] (=ON) 期から存在し、Biddulph（2003: 26）に言わせると、他のゲルマン語系言語との二大相違点の一つということになる。ただし、Gordon & Taylor（1957²: 312）は、“The definite article *inn* was normally suffixed to its noun, unless adj [ective] . preceded the noun. The two forms of the definite article *sá* and *inn* were often used together, as in *þat it helga sæti* ‘the holy seat.’”（*þat it* は、*sá inn* の中性・単数・主格形）と述べ、ON に独特な「二重定冠詞」ともいふべき現象にも言及している。

- 10) Smith（1893）によると、OE 期の *Orosius*（9 世紀の終わり頃）や *Ælfric* の *Homilies*（10 世紀の終わり頃）における従属節での語順に関して以下のような統計が示されている（V=finite verb, v=non-finite verb）。

(i) <i>Orosius</i>	SvV: 43%	<i>Ælfric Homilies</i>	SvV: 20%
	SOvV: 17% Total: 60%		SOvV: 8% Total: 28%
	SVv: 15%		SVv: 26%
	SVOv: 11% Total: 26%		SVOv: 11% Total: 37%

明らかに、VF 構造が減少し（60% から 28% へ）、V3 構造がわずかながら増加しているのが分かる（26% から 37% へ）。この推移の理由に関して、Smith は、次の三点を挙げている。

- (ii) a. the greater simplicity of SVX
 b. analogy with main clauses
 c. analogy with indirect affirmative clauses (= *þæt*-clauses with verbs of saying)

(iia) の「簡索性」は、主観的で曖昧な言い方ではあるが、ある意味魅力的な説明と言える。また、(iic) は、かなり問題が多そうであり、そして (iib) は、最も容易に考えつく理由と言えよう (C. A. Smith, “The order of words in Anglo-Saxon prose,” *Publications of the Modern Language Association of America*, 8, pp.210-244. Denison (1993: 32) の引用による)。

- 11) ここでは、児馬 (1996) で指摘された話題化構文 (OSV) が抜け落ちているが、おそらく安藤はこれをより文体的な特殊構文と見なしたのではないか。
- 12) 否定辞 *ne* を独立させるか否か、すなわち clitic 的な定動詞成分の一部と見なすか否かによって、V4 か V5 の判断は分かれるだろう。Cf. 上例 (15b) の *nule* (=ne will) “will not.”
- 13) もちろん、『オルムの書』においても、全ての従属節の例が V3 構造へ移行しているわけではない。従来からの VF 構造も以下のように散見される。

(iii) þatt ani3 wimmann hire lif i ma33þhad ledenn **wollde**.

(=that any woman her life in maidenhood lead **would**)

- 14) カーカー他 (2001: 16) によると、北欧の三つの国民言語、すなわち古西ノルド語 (ノルウェー語とアイスランド語)・スウェーデン語・デンマーク語が ON から発展的に区別されるようになるのは、1200 年代の半ばである。その後、ノルウェー語は 1300 年代からスウェーデン語やデンマーク語と同じ方向に言語変化の舵 (単純化) を取り始めたため、残されたアイスランド語のみが複雑な ON 的特徴を強く残すことになっていった。
 - 15) このことについて、Rask & Dasent ([1843] 1976: 190) も、“The verb is often put before subj [ect].., though no question is asked; but most often when the sentence is dependent on, or connected with, another going before it.”としている。現代アイスランド語にも残留している、口語ではなく文語での現象である “narrative verb-initial order” (König & van der Auwera, 1994: 181) のことである。
- 松瀬 (2000: 50) で指摘したように、言語接触を考えると、口語と文語を区別して捉えることは非常に重要であるが、この V1 構造は、例えば、スカールド詩の朗詠のような形で OE 話者の耳に入った可能性も否定できない。
- 16) Ásbjörn の <ö> は、本来は <o> の下にセディーユの逆向きのような記号が付け加えられた、ON 独特のアルファベットで、音価は「低・後・円唇母音」の /ɔ/ を表している。本稿では、これを表示する適切なフォントがないために、<ö> で表示した。
 - 17) これとは対照的に、「右方付加 [Right Adjunction]」も観察される。

(iv) jarl svarar vel orðum konungs ok stilliliga.

(=earl_N answers well words_D king_G and calmly)

“The earl answers the king’s words well and calmly.”

—Faarlund (2004: 242)

- 18) また、Trips (2002: 275) が引用する Maling (1990) は、現代アイスランド語において文体的前置が適応されるのは、過去分詞・副詞句・形容詞句・動詞不変化詞であるとしているが、そのみならず、ON 期には、特に主格関係詞節の場合は、(代) 名詞句も前置可能だったのである。

(v) a. eina dottur er Droplaug hét

(=one daughter who Droplaug_N was-called)

“one daughter who was called Droplaug”

b. sú sveit, er honum hafði fylgt

(=that troop_N which him_D had followed)

“the troop which had followed him”

—Faarlund (2004: 251)

(va) は、一見 VF 構造をしているようだが、(vb) を見れば、V3 構造であることが理解できるので、この文体的前置は VF (OV) 構造を招来するものではなかったと考えられる (J. Maling, “Inversion in Embedded Clauses in Modern Icelandic,” in J. Maling & A. Zaenen, eds., *Modern Icelandic Syntax, Syntax and Semantics*, 24, pp. 71-91).

- 19) Elmer Ternes, “Ist Bretonisch SVO oder VSO? Typologische Überlegungen zu einer umstrittenen Frage,” in Stefan Zimmer, Rolf Ködderitzsch, & Arndt Wigger, eds., *Akten des Zweiten Deutschen Keltologen-Symposiums*, Tübingen: Niemeyer, pp. 236-253. Heine & Kuteva (2005: 161) の引用による。

また、Trepos (1994: 155) は、(26b) の “a zo” について、“Un vieux relatif est resté sous la forme -O,

dans l'impersonnel présent de BEZA «être»: ZO veut dire en réalité «qui est », ..., et n'exige pas d'être précédé de la *particule verbale* A.” と解説している。

- 20) Marshall (2004: 48) は、精神論的「態度」の定義として、“a ‘readiness to respond,’ i.e. an underlying, intervening variable between a stimulus and a response” を挙げている。

参考文献

- 安藤貞雄. 2002. 『英語史入門—代英文法のルーツを探る—』東京：開拓社。
- Baugh, Albert C. & Thomas Cable. 2002. *A History of the English Language*. 5th edition. London: Routledge.
- Biddulph, Joseph. 2003. *Old Danish of the Old Danelaw*. Pontypridd: Cyhoeddwr Joseph Biddulph Publisher.
- Comrie, Bernard, ed. 1989. *The World's Major Languages*. Revised edition. London: Routledge.
- Coulmas, Florian. 2005. *Sociolinguistics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Denison, David. 1993. *English Historical Syntax*. London: Longman.
- Faarlund, Jan Terje. 2004. *The Syntax of Old Norse*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Fasold, Ralph W. & Jeff Connor-Linton, eds. 2006. *An Introduction to Language and Linguistics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, & Wim van der Wurff. 2000. *The Syntax of Early English*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Gordon, E. V. & A. R. Taylor. 1957. *An Introduction to Old Norse*. 2nd and revised edition. Oxford: Clarendon Press.
- 橋本功. 2005. 『英語史入門』東京：慶應義塾大学出版会。
- Heine, Bernd & Tania Kuteva. 2005. *Language Contact and Grammatical Change*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Hogg, Richard M. 2002. *An Introduction to Old English*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- Holmberg, Anders & Christer Platzack. 1995. *The Role of Inflection in Scandinavian Syntax*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Holmes, Janet. 2001. *An Introduction to Sociolinguistics*. 2nd edition. Harlow: Pearson.
- Horobin, Simon & Jeremy Smith. 2002. *An Introduction to Middle English*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- Huddleston, Rodney & Geoffrey Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 角谷英則. 2006. 『ヴァイキング時代』京都：京都大学学術出版会。
- Karker, Allan, Brigitta Lindgren, & Ståle Løland, eds. 1997. *Nordens Språk*. Oslo: Novus forlag.
(=カーカー, アラン他編. 山下泰文他訳. 『北欧のことば』東京：東海大学出版会, 2001年.)
- Kastovsky, Dieter & Arthur Mettinger, eds. 2003. *Language Contact in the History of English*. 2nd & revised edition. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Kibler, William W. 1984. *An Introduction to Old French*. New York: The Modern Language Association of America.
- Knowles, Gerry. 1997. *A Cultural History of the English Language*. London: Arnold.
(=ノールズ, ジェリー. 小野茂・小野恭子訳. 『文化史的に見た英語史』東京：開文社, 1999年.)
- 児馬修. 1996. 『ファンダメンタル英語史』東京：ひつじ書房。
- König, Ekkehard & Johan van der Auwera, eds. 1994. *The Germanic Languages*. London: Routledge.
- Leith, Dick. 1997. *A Social History of English*. 2nd edition. London: Routledge.
- Machan, Tim W. & Charles T. Scott, eds. 1992. *English in Its Social Contexts*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Marshall, Jonathan. 2004. *Language Change and Sociolinguistics*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- 松瀬憲司. 2000. 「言語接触と言語変容—古英語・古ノルド語間の接触について—」
『熊本大学英語英文学』43, 41-55.
- 松瀬憲司. 2001. 「初期英語における文法上の新しい仕掛け—古ノルド語からの『贈り物』—」『熊本大学教育学部紀要』人文科学編 50, 41-53.
- 松瀬憲司. 2004. 「後期中英語北部方言について—三人称複数代名詞と三人称単数現在動詞語尾を巡って—」『熊本大学教育学部紀要』人文科学編 53, 21-33.
- 松瀬憲司. 2005. 「デーンロー地域での言語使用について」大津隆広・西岡宣明・松瀬憲司編, 『ことばの標—平井昭徳君追悼論文集—』, 115-129. 福岡：九州大学出版会。
- Rask, Rasmus Kristian. 1843. *A Grammar of the Icelandic or Old Norse Tongue*. Trans. by Sir George Webbe Dasent. London: William Pickering.
(=New edition by T. L. Markey, Amsterdam: John Benjamins, 1976.)
- Ritt, Nicholas. 2003. “The Spread of Scandinavian Third Person Plural Pronouns in English: Optimisation, Adaptation, Evolutionary Stability.” In Kastovsky & Mettinger, eds., 279-304.

- Ritt, Nicolaus. 2004. *Selfish Sound and Linguistic Evolution: A Darwinian Approach to Linguistic Change*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Smith, Jeremy J. 1992. "The Use of English: Language Contact, Dialect Variation, and Written Standardisation During the Middle English Period." In Machan & Scott, eds., 47-68.
- Townend, Matthew. 2002. *Language and History in Viking Age England: Linguistic Relations between Speakers of Old Norse and Old English*. Turnhout: Brepols Publishers.
- Trepos, Pierre. Eds. by Brud Nevez & Emgleo Breiz. 1994. *Grammaire Bretonne*. 4th edition. Brest: Mesidou.
- Trips, Carola. 2002. *From OV to VO in Early Middle English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Winford, Donald. 2003. *An Introduction to Contact Linguistics*. London: Blackwell.